



日本海

日々の様子は学校
ホームページから！



「藤塚小ブログ」は連日更新中！



「物によるご褒美作戦」を安易に使い続けると・・・



校長 山田 耕世

「〇〇できたら、ゲームを買ってあげるよ！」

このような「物によるご褒美作戦」を普段から使っている方もいるかもしれません。なぜ使うかという、「物によるご褒美作戦」は、即効性があり、私たち大人の理想通りに子どもが動いてくれるからです。

しかし、「本当にいいのだろうか？」と自問自答したことがある方もいるでしょう。私たち大人が、物に依存した子育てを続けていくと、子どもは物に依存して行動しやすくなるのが、心理学的に明らかになっています。一旦、ご褒美をあげると、ご褒美をもらうことが子どもにとって大きな目的になってしまい、やる気が奪われてしまうということなのです。

それではどのようにして、子どものやる気を育てていくことが大切なのでしょう。

子どものやる気を育てるならば、まずは「〇〇できたら、〇〇をしてあげる」という「約束」を子どもとしないことです。この「〇〇をしてあげる」といった「約束」をしてしまうと、大人が「約束」を守れなかった時、「〇〇できたのに何で〇〇してくれないの？せっかくだら頑張ったのに・・・」「だったら、〇〇をしなればよかった・・・」などといった子どもの声を聞くこととなります。

その上で、温かい励ましや褒め言葉、承認の言葉などの「物ではない作戦」を使って、子どもが本来もっている「やる気の芽」を少しずつ大きく育てていくことが重要と考えます。アンテナを張り巡らせ、大人から見て、たとえ些細なことにも思われても、子どもの頑張りや成長を見逃さず伝えていくことです。その際に、できるだけ具体的に伝えることと伝えるタイミングが大切と考えます。



しかしながら、現実的にはうまくはいかないこともあるかもしれません。そのような場合、できるかぎり温かい励ましや褒め言葉、承認の言葉を使っていき、本当にどうしても動かないときのみ、「物によるご褒美作戦」を用いるのであれば、「物でしか動かない」という状態に陥りにくくなると言われています。

また、「宿題をしたら・・・」「学校に行けたら・・・」などといった「物によるご褒美作戦」を安易に使うのではなく、「1か月後にある□□に向けて、毎日コツコツ頑張ったら・・・」など、ある程度努力する期間が長いものに関して使うことは決して悪いことではないと言われています。なぜなら、子どもは、結果ではなく努力の過程に対して何度も褒めてもらうことができ、承認欲求を満たし、自己肯定感を育むことにつながるからです。

いずれにしても、「安易な物によるご褒美作戦」ではないやり方で、子どもたち一人一人が本来もっている「やる気の芽」を一緒に育てていこうではありませんか。